

氏名	田崎 教子
ヨミガナ	タサキ ノリコ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第260号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 音楽的活動における保育者の発信的・応答的能力の向上 ークリニカル・ミュージシャンシップ援用の可能性ー

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	丸井 淳史
（副査）	神戸大学大学院	准教授		岡崎 春奈

（論文内容の要旨）

本研究は、音楽的活動における保育者の発信的・応答的能力の必要性を論じ、その能力が、保育者養成校においてどの程度育成可能なのかを探ることを目的とした。その際、ノードフ・ロビンスの「創造的音楽療法」の概念と、セラピストに必要なクリニカル・ミュージシャンシップを援用しながら、保育者に必要な音楽性について検討した。

第1章では、子どもの音楽的な表現を支える保育者の専門性には、何が必要なのか、また音楽的活動を行う保育者の実態を探るために、関連文献と保育者への質問紙調査に基づいて考察した。

保育者の専門性には、子どもの個性と保育者のもつ豊かな基盤を作用させる発信的・応答的能力が必要であることが示された。また音楽的側面では、これまで力を入れてきた発信的な能力の育成ばかりでなく、子どもの表現との間で発揮する応答的な能力の育成が望まれていることが導き出された。さらに保育者への調査からは、子どもの表現に対する「音による応答性の欠如」と、応答するための「音楽的資源の乏しさ」が導き出された。

第2章では、「音楽による応答性」を重視する「創造的音楽療法」の概念と、セラピストに必要なクリニカル・ミュージシャンシップが、保育者の音楽性を考える上で有用なのではないかという仮説のもと、これらを考察し、保育者に必要な音楽性の全体図を示した。

「創造的音楽療法」を援用する利点として、音楽中心性と、音楽の様々な機能を的確に用いて自己成長を促す点を挙げた。特にミュージック・チャイルドは、保育の子ども観との間に共通性が見られた。また、ノードフの音楽観を探り、クリニカル・ミュージシャンシップの要素である音楽的資源について考察した。ここでは音楽的資源を体験的知識として感じ、それらを効果的に用いること、子どもとの創造的な行為の中で新鮮な音楽を使うこと、そして自身の表現におけるレベルアップを目指すことを示した。

次に、セラピストが保育の場で実践している先行事例を考察した。ここからセラピストの即興性と創造性を帯びた応答的な関わりがみられ、療法的アプローチを援用するための具体像を示した。

さらに、子どもや音楽の捉え方の面で有用性を見出した。子どもの表現の捉え方では、表現の主体、表現のプロセス、表現のゴール、他者との関わりにおける拡大と深化の面で共通性がみられた。また音楽の捉え方では、目的と表現手段に共通性がみられた。保育者の関わりのプロセスは、臨床的かまえをもって観察し、表現を受容し、読み取ること、音楽的応答によって表現すること、これらを反復しながら相互反応性を促すこと、状況のみて方向性を見極めること、これらのプロセスを経て、「快」の感情が生まれるよう関わること

が導き出された。応答的能力に関わる項目として追加したのは、「子どもの状況とニーズの把握」、「直感的な表現の受容」、「音楽的な反応」、「方向性をもった活動」である。

第3章では、保育者養成校における音楽性の育成が、どの程度可能なのかという問いのもと、学生に対して質問紙調査と授業実践を行い考察した。

学生が保育の音楽的活動に対してもつイメージは、本人の幼少期以降の経験が反映している可能性が高いため、養成校では学生の意識改革を目指し、新たな音楽の捉え方や音楽の使用法の提示が必要であることを述べた。

次に、即興性を重視した授業における学生の変化は、即興演奏に対するイメージや楽器の機能、創造性を生む構造、相互反応性の過程で起こる音楽的なコミュニケーションの面でみられた。さらに学生の学びに階層がみられ、表層レベルでの「子ども体験」と、深層レベルでの「保育者体験」があった。この両方を段階的に体験させることが、保育者に必要な音楽的能力の習得につながることを示した。

また、描写性を重視した授業において学生が獲得したのは、音に対する認識の拡大や音で描写することへの関心、音の様々な機能についての理解、相互反応性の重要性の4点であった。子どもとの応答的なやり取りを深めていくには、「観る」、「観られる」の両視点を持ち、相手への「伝わりやすさ」と、相手からの「ありのままの受け入れ」が必要であることを示した。

最後に、保育者養成校における音楽性の育成の展望について言及した。即興性を重視した事例は、子どもの感情や思惑を疑似体験するのに相応しい「主観的な体験」として意味があった。音の描写性を重視した事例では、描写する過程

で、子どもの表現をどう発見し、それを音でどう表現するのかという「客観的な体験」として、観る目と表現する力を養うことができた。以上から、保育者における音楽性は、音楽的知識や技能と共に、音楽的な感受性を豊かにする必要がある。それらがバランスよく育成されてはじめて、発信的能力と応答的能力を兼ね備えた音楽性を獲得することが可能になることを示した。

#### (総合審査結果の要旨)

本研究は、幼稚園と保育園の音楽的活動で保育者に必要とされる発信的・応答的能力を、ノードフ・ロビンの創造的音楽療法における「クリニカル・ミュージシャンシップ」の理念に基づいて解明するとともに、保育者養成校における指導の可能性について検討したものである。申請者は10年以上にわたって保育者養成に携わっており、その経験の蓄積が本研究の基礎となっている。

本研究の内容と成果は、次の3点に要約される。1. 文献調査と現職の保育者への質問紙調査により、保育者の専門性として、音楽による応答的能力を身につけることの必要性を導き出したこと。2. クリニカル・ミュージシャンシップの検討およびセラピストによる国内保育園での事例の分析を通して、「保育者に必要な音楽性」を図にまとめて説明したこと。3. 保育者養成校において即興性と描写性を重視した検証授業の実践を行い、学生の意識の変化を分析したこと。論文全体から、創造的音楽療法に対する敬意と、保育における音楽的活動の充実に対する熱意が感じ取れる。

ただし、審査会では、次のような問題点が指摘された。1. 論を進めるにつれて、応答的能力の概念構成にずれが生じていること。2. 検証授業の分析と結論の導き方に精緻さが不足しており、論理の飛躍や恣意的な判断が認められること。3. 応答的能力として高い音楽的スキルを求めており、保育者養成や保育の場における実現可能性が不明であること。これらの問題を解決するには、さらなる論点の整理が必要であり、特に3については、音楽的な応答的能力のみならず、発信的能力および言語的、身体的な応答的能力とのかかわりをも含めた理論の再構築が必要であると考えられる。

こうした課題が残されているものの、創造的音楽療法の理念に学びながら、これを保育者の資質向上に応用しようとした本研究は、インクルーシブ保育の意義が注目される現代社会において発展の可能性を有するものであり、課程博士として十分な研究成果を挙げたものと全会一致で判断し、合格とした。